

（一）概要とねらい

（１）概要

いわゆる「論文・レポートの書き方」のごく初歩にあたるような科目を、インターネットなど双方向的なメディアを有効に活用し、放送授業と連携した授業として新たに開発し開設する。

なぜ双方向か

ア：課題作文とその添削を頻繁に繰り返すことによって「書く力」の向上を図る学習課程を放送授業のみで扱うには限界がある。そこで、インターネット等の双方向的なメディアを活用し、頻繁な課題提出と添削返却による「書く練習」の積み重ねを主体にした授業を開発、開設する。

イ：学習の開始時期や進み方の遅速の自由度が高く、多様な学習者に対応可能

ウ：実際の採点・添削にあたる協力者とのやりとりをオンライン化することで、勤務形態の自由度が高まり、人材確保が容易になると共に、添削返却の迅速化も図れる。

なぜ放送授業との連携が必要か

ア：単なる表面的な「書く技術の練習」ではなく、「日本語で考えをまとめる力」のために、日本語、特に文章の構成を自覚的に分析し、また確実に構築できることが重要となる。（母語であるが故に、なかなか自覚的になれないことを克服する必要がある。）

イ：うまく書けない学習者の最も基本的な躓きの一つに、「文」と「文章」を区別して考えることができない、という点がある。文章を構成する個々の文の役割を把握して、文章の構成を考えることが重要であり、これは文法論的文章論による文章の分析の初歩と表裏である。

（２）具体的な実現方法

Web教材と学習システム

学習目標をはっきり明示した解説（動画・音声・図表）し、学習者が実際に考え、手を動かしながら学ぶコースウェア。

学習目標毎に提示される「課題」（電子MAILによる提出）

まとまった人数の採点協力者を擁する採点・添削体制

提出された課題の集約、採点協力者への送付、添削済み課題の回収、学習者への返却、およびその全体統括を行うシステム

連携する放送教材

18年度開設予定科目「日本語学概説('06) 母語のすがた」(R・共通科目、主任講師：杉浦)の文章論に関する回を、上記Web教材との連携も念頭に置いて、文章論的観点からの文章の構成の自覚的な分析に資する内容とする。

放送教材では、表現・理解両面から文章論を取り上げるなど、Web教材から独立した履修にも十分配慮する

（３）当面の問題点

単位の付与と教育課程上の位置づけ

インターネット環境を持たない学生への配慮

障害を持つ学生・日本語を母語としない学生、等々への配慮

Web教材の制作、学習システムの構築・運用・維持管理、等の費用

(二)「日本語表現法(基礎)」(仮称) 内容構成(素案メモ)

《全体構成: Web = 教材30分 × 10回、課題 = 8回 + 最終課題》

回	章題	主な内容	この回のポイント
イントロ	はじめに	このコースの目標と学び方	自分の考えを、読む人に納得してもらえるように、筋道立てて説明する この講義は: どうしてもうまく書けない人のための、最初の一步 最低限の「こうすれば何とかなる」
1	考えを表明する	考えの述べ方のパターン(A)	「 は である。なぜならば〜。」
		パターン(A)の練習	「 は である。なぜならば〜」型の練習
2	納得してもらえるように説明する	パターン(A)での説明の方法	「なぜならば〜」に続く「例えば、〜。」「さらに、〜。」「また、〜」
		課題	に続けた説明の練習
3	結論としての考えの表明	考えの述べ方のパターン(B)説明の積み重ね.....。だから、 は である。
		パターン(B)の練習	課題 を説明部分から書き起こす形に書き直す
4	よりインパクトのある構成へ~その1	パターン(A)とパターン(B)を組み合わせる。	「 は である。なぜならば〜。」.....説明.....「だから、 は である。」
		組み合わせ型の練習	課題 ~ を組み合わせ型に書き直す
5	より効果的な表現	組み合わせ型の弱点を補う方法	「 は である。」~「 は である。」~「 は である。」
		言い換えた表現の練習	「 は である。」の言い換える。
6	パターンの組み合わせや積み重ね	複雑な説明は、パターンの繰り返し、組み合わせ、積み重ねで	「 は である。」を複数の「 は である」に分解する。
		分解の練習	考えと具体的な説明の間に、段階を付けてみる練習

7	よりインパクトのある構成へ～その2	問いかけ、問題提起から書き起こす	「 は であろうか。 」……説明……」 誰に、何を問いかけているのか、を常に忘れずに
問いかけの型の練習 問いかけ型を書き出しと、その後の説明の工夫			
8	課題作文への対応	課題は何を求めているのかを的確に把握する	身近な日用品を例に挙げ、日本と欧米の考え方や生活習慣の違いについて述べなさい(1200字)……という課題に対応するには
課題が求めていることを把握する練習 回答の作文に含めなければならない事項を挙げる			
9	実作～おさらい	これまでの学習で得た事項を盛り込んでの実作	先ず、主張する自分の「考え」を決める……これが一番難しい。 「 は 」=何について述べるのか
最終	総まとめの作文練習(最終課題) 書く前に先ず、しっかり「考え」を持つ。		

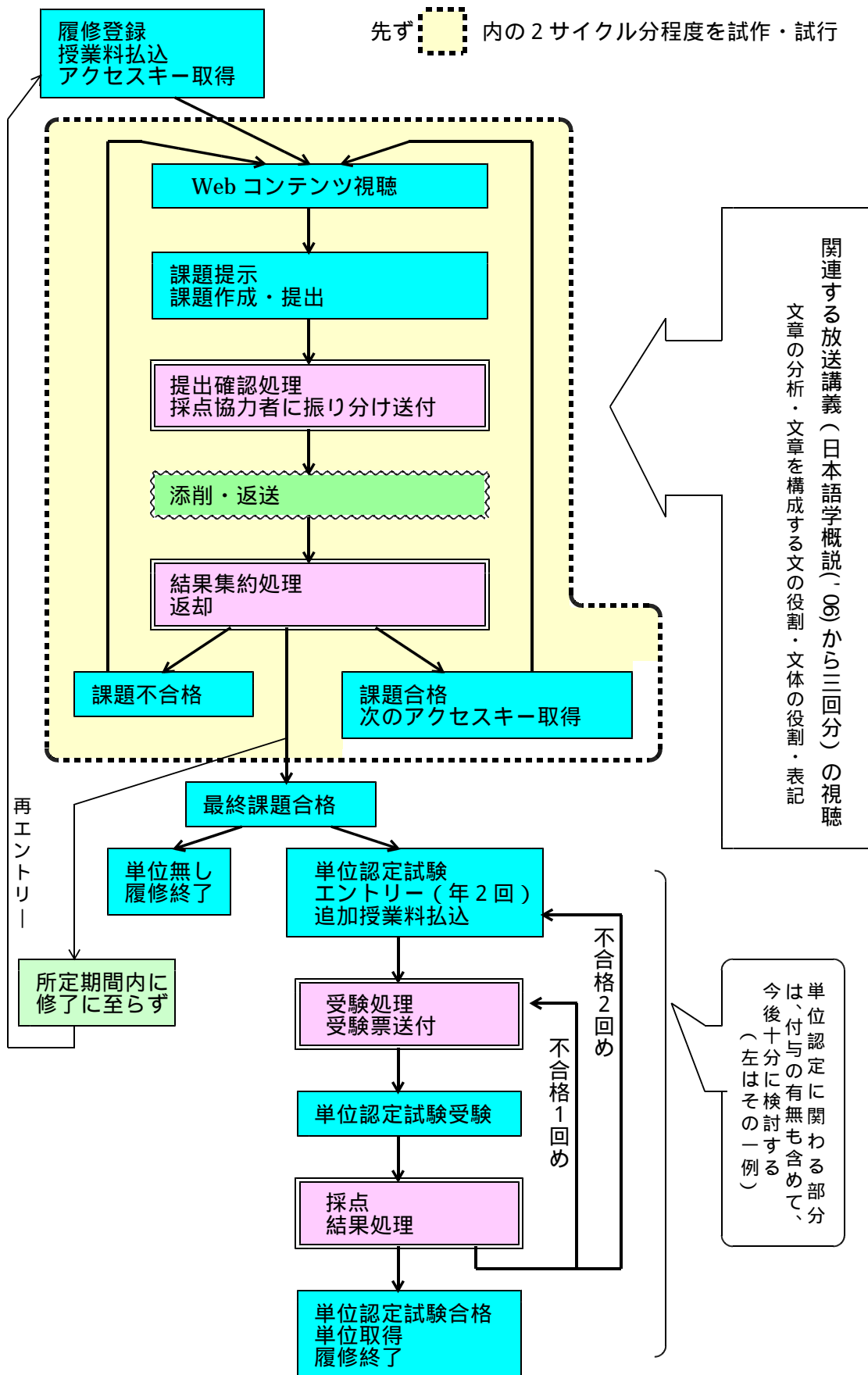
連携する放送授業の内容から

- ・ 単語と単語をつなぎ合わせたひとまとまりが「文」であるように、文と文をつなぎ合わせたひとまとまりが「文章」。
- ・ 単語が様々な役割を担って文を組み立てるように、文章を構成する文にも様々な役割がある。
- ・ 文章の構成を考える場合、一つ一つの文の役割をしっかりと把握することが重要。
例：「自分の考えを述べる文」「根拠となる事実を述べる文」……
- ・ その文章の目的、内容、想定される読者、などによって、よりふさわしい表現がある。

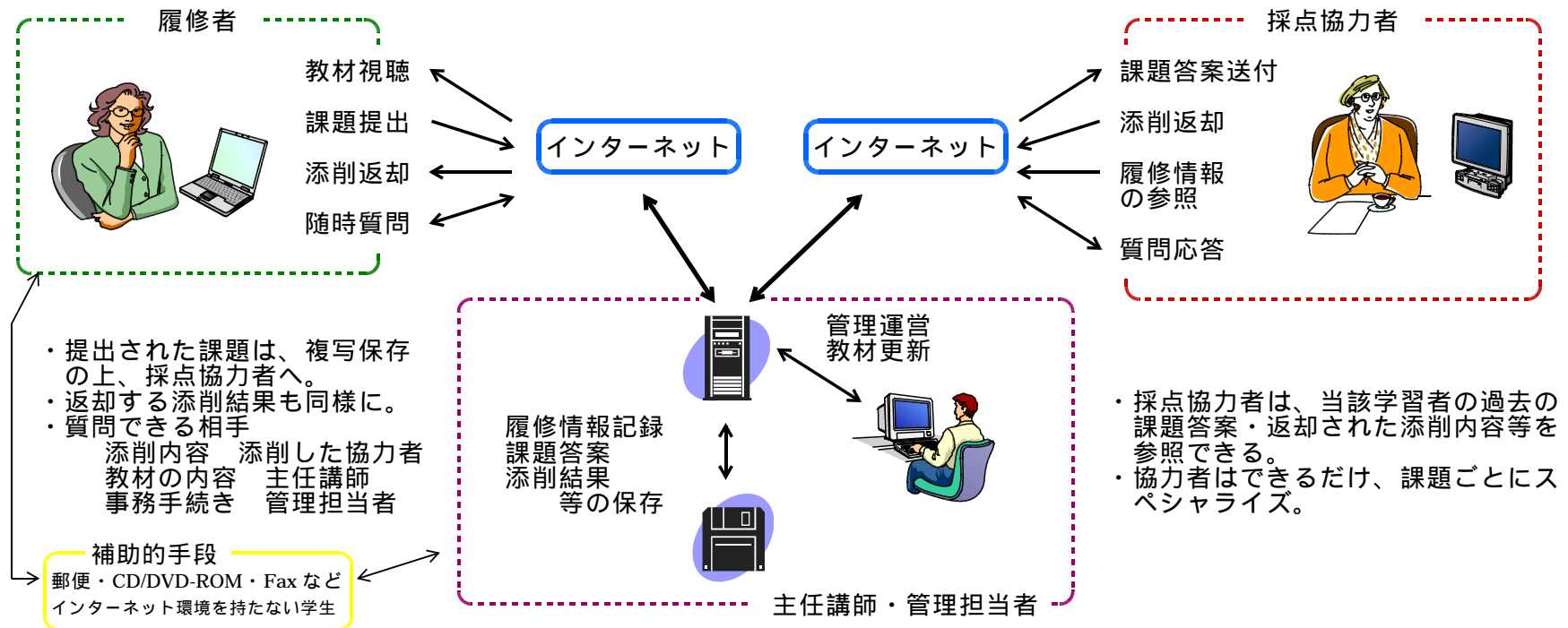
日本語学概説(06) 「11：文章～的確な理解のために」 「12：文章～的確な理解のために」 「13：表記と文体」

「イントロ(仮)」「第1～2回」「第1～2課題」程度を、平成16年度中に試作

「日本語表現法（基礎）」（仮称） 履修の流れ概念図（素案メモ）



(四)「日本語表現法(基礎)」(仮称) 運営システム概念図(素案メモ)



(五) 日本語表現法 (基礎) Web教材 基本構成案メモ



(1) 画面の基本構成

基本構成：TV放送教材の形態をベースに

- a 1本30分程度(全10本程度)
- b 講師と模擬学生的聞き手の掛け合い形式+講師の解説
 模擬学生：解説に従って各回のテーマとなる課題作文の構想を練ってみせる。
 その課程での疑問などを質問。

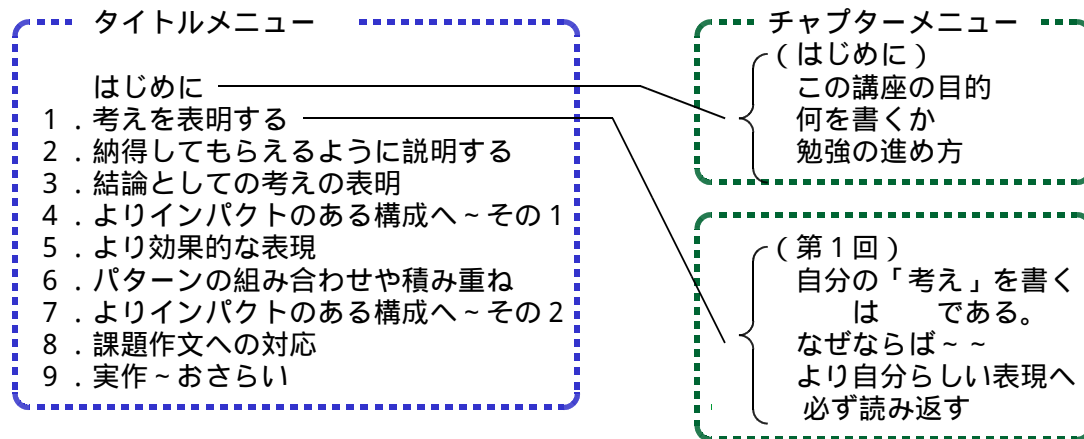
Web教材としての特色

- a 1本を5~6程度のチャプターに分けて構成
- b チャプタータイトル付加、スキップやジャンプ可能
- c いつでも、「参照」にジャンプ可能

ワンポイントアドバイス

- a 1回の中に2~3個のワンポイントアドバイス
- b 主に表現上の問題を扱う

(2) メニュー構成(例)



(3) 参照

「参照」をクリックすると、別窓が開いて参照情報へ



メニュー様式案の一例

参照情報メニュー

- a 原稿用紙の使い方
 - b 現代仮名使い規則
 - c 外来語の書き表し方
 - d 句読法
 - e 常用漢字表
 - f 定型表現集
 - g ワンポイントアドバイス一覧とジャンプ
 - h 日本語学概説('06)第11~13回の視聴
 試作・試行段階では現行科目「国語学概論('02)」第9回
- } HTML文書として別途作成・UP
 試作段階でもいくつかは仮版を用意し
 使い勝手を検証する

(四) 課題答案作成画面(検討中)

- 16年度試作：案 メールソフト(送信メール作成画面)のポップアップ
- 案 各自ワープロソフトで作成しメールの添付で送信
 ソフト・文書様式・ファイル形式などを指定
- 本体の制作：試行に基づき上記の使い勝手を検討して作成
- 問題点：縦書きの扱い 解欄のマス目

(五) 添削返却の様式(検討中)

- 16年度試作：案 通常のメール返信：逐語的な添削がやりにくい
- 案 ワープロソフトで作成された答案に添削書き込み
 ソフト・文書様式・ファイル形式などを指定
- 本体の制作：試行に基づき上記の使い勝手を検討して作成

(附)「日本語学概説('06) 母語のすがた」シラバス

全体のねらい

日常に使っている母語を敢えて意識的に分析してみると、きれいな体系を持っていることに気付く。どのような点に着目し、どのような方法を用いるとそれがわかってくるかを、身近な用例を挙げて概説し、その結果明らかになる日本語の様々な特色と体系の一端を示す。日常的な言語生活の中から母語を見つめ直すという視点に立ち、できるだけ専門的な用語を避けた概説を基調とするが、研究・分析に進む興味・関心への発展にも配慮する。

1 母語としての日本語

自らの中にありながら、意識的に分析し、形に表すことが難しい母語の体系を記述するための基本的な手法を紹介すると共に、これまで先人は母語である日本語をどのように見つめてきたかを概説し、本講義全体の考え方を示す。

2 方言

日常的な言語使用の中で、母語を顧みる機会の端的な例として方言をとらえ、実際にはことばのどのような点が方言として感じられるのかを考え、これを手がかりに、方言を分析的に考える方途をさぐる。さらにこれまでの方言研究を概観し、併せて標準語・共通語との関係、ことばの位相、近時の方言研究の新視点の実際例を紹介する。

3 敬語

日常的な言語使用の中で、自分の使っている言葉を意識する機会の端的な例として敬語をとらえ、その本質が言語使用上の人物に対する配慮であることを概説する。実際の敬語表現を整理すると共に、配慮の背景には、敬意だけではなく、身内か他人か、言語使用の場、など様々な要素があることを示す。

4 音

音を日常的な言語使用の中で分析的に意識することは難しいが、どうすればそれが可能か、敢えてそれを行うと何がわかるかを、実際に例を挙げながら概説する。またアクセントの実態を、基本的な性質である型の対応を中心に概説する。これらによって、自身が身につけている音が意識されないきれいな体系を持っていることを示す。

5 音の変遷

現代我々が用いている日本語の音は、様々な変化を経てきている。これを、漢字音の移入、外国語との接触、外来語の移入、などの外的要因と、日本語の音それ自体の内的要因の二つの方向から概説する。また、これを例として、ことばの歴史的な変化をたどる際の基本的な考え方を示す。

6 文字

日本語では基本的な性質の異なる漢字と仮名を併用している。先ずこの点に着目し、漢字・平仮名・片仮名の文字としての特色と用いられ方の実態を考える。さらに日本語における文字使用の変遷を漢字と日本語との関係を軸に概観する。

7 語と意味

一般的な意味で、ことばについて考えようという際には、単語を単位とする場合が多い。これは意味を表す最小の単位として単語が先ず念頭に浮かぶ、ということによると思われる。この点を手がかりに、語と意味の関係はどのように分析・記述できるかについて、複数の考え方を示し、ことばの意味のとらえ方を概説する。

8 語の由来

ことばについて少し踏み込んで考えてみようとする時、語源やことばの意味の変化が意識される機会は多い。身近な語例を挙げ、語誌についての基本的な考え方や手法を示す。さらに、現代の日本語に見られる和語・漢語・外来語の各々の由来と特色を概説する。

9 文と語のはたらき

文は語と語を組み合わせて作られ、その組み合わせ方のきまりが文法である。そのきまりは、一つ一つの語の果たす役割と、文全体の組み立ての二つの視点からとらえることができる。ここでは主に前者から、簡単な用例を挙げて語が文の中でどのような働きをするかを概説し、日常のことばが、意識されないうちに一定のきまりに従って用いられていることの一部を示す。

10 文の組み立て

文の基本的な組み立てを担うものは何か。何に着目するとそれが明らかになるか。身近な例文を分析することでその一端を示す。さらに、現代の日本語の文の構造を考える手がかりの一つとして、古文と現代語を比較すると、文の組み立ての基本が大きく異なることを概説する。

11 文章～的確な理解のために

単語と単語をつないで文が作られるように、文と文をつないで作られるものが文章である。文章の構成にも一定のきまりがあり、個々の文の果たす役割がそれを担っていることを概説する。さらに、文章を的確に理解するためには、その構成と個々の文の役割を認識することが不可欠であることを、実際の文章例を分析することで示す。

12 文章～的確な表現のために

的確に表現するためには、文章の構成について十分な配慮が必要である。そのためには個々の文の果たす役割を把握することが不可欠である。実際に文をその役割で分類し、それを考えに沿って構成することで文章が成り立って行く過程を示し、併せて様々な文章表現の諸相を概説する。

13 表記と文体

実際にことばで表現する際、同じような内容であるのに複数の表し方があることを我々は経験的に知っている。このことを表記と文体の二つの面からとらえる。性質の異なる文字種を混用する日本語の表記の実体を概説する。また、文体を社会規範的な側面と個性に関わる側面の双方から、実際の例に基づいて概説する。

14 国語教育

生活のあらゆる場面で、意識するかしないかに関わらず、我々はことばを身につける機会に遭遇しているが、一方で母語を組織的・系統的に身につける機会として、国語科教育を受けてきている。国語科教育は何を目的に、どのように行われてきたかを概観し、日常のことばの使用との関係を考える。さらに今後どのようなことばの教育が必要とされるかについて、いくつかの考え方を示す。

15 国語問題とこれからの日本語

実際のことばの使用の上で生じる様々な障害が国語問題である。これまで主に取り上げられてきた国語問題を概説する。さらに、今後どのようなことに目を向けていくべきかを、主に情報通信技術の急速な進展と日常のことばの使用の関係から考える